



古き良き 吉岡を綴った 新しい吉岡の歌

松岡 達雄さん (作詞)
横手 英雄さん (作曲)



松岡達雄さん(右)。陣場在住。吉岡中校歌の歌詞募集に応募し多くの作品の中から選考される。
横手英雄さん(左)。渋川市在住。当時の明治中に新任教諭として勤務して以来吉岡とは深いかわりを持つ。昭和44年の吉岡中設立時には音楽教諭として、吉岡中学校の校歌を作曲した。

吉岡町の情景を綴った、新しい歌が生まれました。この歌には、吉岡の四季が昔の農家の作業を通して綴られています。

♪名コンビ再結成

この歌を生み出したのは、陣場の松岡達雄さんと渋川の横手英雄さん。吉岡中校歌を作った名コンビです。このお二人の再結成は、地域の皆さんのふる里を愛する強い気持ちにより成し遂げられました。

♪ふる里有情誕生

きっかけは、地域の皆さんが松岡さんに相談をしてきたこと。地域の皆さんは、昔ながらの農村風景が失われつつある今、古き良き吉岡を後世に伝える手段はないかと考えていました。『堅苦しい文書では読んでもらえないだろう』そんな議論のなか、歌にしたら多くの人が口ずさんでくれるのではないかと考え、松岡さんをお願いすることになったのです。

♪どんな歌にするか

まずは、人々に親しみをもってもらえなければいけません。より多くの年代に受け入れられるように叙情歌の形をとりました。

内容は、農家の嫁から見た1年を綴りました。冬のどん

ど焼きや小正月。春の祭りの太々神楽や養蚕の始まり。初夏の田植えに、長雨や日照りの厳しさ。そして秋の収穫の喜び。移りゆく四季が凝縮された、美しい歌が誕生しました。

♪歌が伝える大切な心

この歌を通して伝えたいこと。それは、家族の温かさだと松岡さんは語ります。豊かではないが家族ぐるみで農業に取り組む姿。地域で行われる年中行事が待ち遠しく楽しみだった頃。家族は一つにまとまり、地域は協力し合い、厳しい自然に立ち向かっていました。そんな、人間の温かいつながりを、歌を通して表現したのです。

♪地域に広がる「ふる里有情」

今、この歌は、地域の取り組みから町全体へと広がりをみせています。吉岡中合唱部による敬老福祉大会の発表では、多くの人々に感銘を与え、生徒の歌声はCDとなり、多くの人にメッセージを届けました。

今回の取り組みは、全て地域住民の皆さんの力によって行われました。住民が地域を愛する心は、大きな力となって、ふる里吉岡を守り、発展させることでしょう。

ふる里有情

一、八幡川も凍る夜
星雲焦がす道祖神
蒔玉かざし御神火に

みんな幸福祈ります
明けて女の小正月
実家へ年始の泊り客

二、桑が芽吹いて春祭り
太々神楽笛太鼓
桜吹雪に餅が舞う
賑わい去って朧月
春蚕始まる切なさに
愛し嫁御の顔くもる

三、麦刈り田植えせかすように
山鳩が鳴き蛙鳴く
寝る間も惜しむ明け暮れに
日照り長雨ままならぬ
祇園祭が近づいて
働く子等がいじらしい

四、季節は廻って秋来ても
花火は遠い物語
稲刈り終えて麦蒔けば
鼠寒ぎに十日夜
二十日えびすもやってくる
温もりうれし長い夜